

## モンスター娘に襲われる A S M R ～ミミックのオキューラ編～

(Attacked by a Monster Girl ASMR - Mimic Girl Ocula Version -)

あらすじ：

冒険者が訪れる大樹海。樹海のダンジョンには、人間の天敵ともいえるべき魔物がいる。宝箱に化けるミミックである。

人工物にしか見えない外殻で人間をおびき出し、うかつに開けた人間を触手で捕食する。自力で動けないミミックたちは、生殖も誘われた人間頼りである。ミミックのオキューラは特に人を驚かせるのが大好きで、人間を騙すことに性的快感をおぼえる変わり者。捕まえた冒険者をたっぷりいたぶる快感に酔いながら、最後には永遠のオモチャになるか、それとも捕食されるかを選ばせるのだった。

登場キャラクター：

ミミックのオキューラ：

ミミックの少女。擬態の精度が自慢であり、人間を上手くだますのに快感を覚えている。より精巧にだますために、外殻である宝箱の手入れは怠らない。興奮すると舌を出す癖がある。宝箱の内部は一種の異空間のようになっており、オキューラの上半身、大量の触手、これまでに集めた食べ物や宝飾品などが詰まっている。捕食の際は、触手で動きを封じてから、性器にあたる部分で人間をまるごと飲み込み、その後に消化する。人間を徹底的にもてあそびたい、人間大好きな特殊な個体。

少年冒険者：

古代文明の遺産を求めて、ダンジョンへの出入りを繰り返すトレジャーハンターの少年。直接戦闘は苦手。戦闘を避け、宝箱などから貴重な宝を手に入れることを目的としている。本物の宝箱とミミックの見分け方にも習熟していたが、オキューラの擬態は見抜けずに、あえなく触手につかまってしまった。やや小生意気な性格であるが、オキューラにしてみればいじりがいいのあるオモチャ人間にすぎない。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い ～上手に化けたでしょ～

オキューラ「ばあー！ 捕まえたあー！」

オキューラ「暴れんなって！ もう触手で拘束しちゃってるから、逃げられないよ！」

オキューラ「ちょっとお！ 痛い目見ないと分からないかな？ 噛みついちゃうよ？」

オキューラ「オマエさあ！ 今、自分がどんな状況か分かってる？」

オキューラ「宝箱に化けたミミックに上半身喰われて、足とお尻だけ外に出してバタバタさせてんの！」

オキューラ「かっこわるう〜い。ふふふっ、でも離さないからね。がぶがぶ、がぶがぶ……って」

オキューラ「あー、もー！ 抵抗すんな！ いい加減にしろって！」

オキューラ「ボクが本気を出したら人間の背骨くらい簡単に噛み碎けるんだからねっ」

オキューラ「それとも、この宝箱のふちに生えた立派な牙でオマエの肉を引き裂いてほしいのかな？」

オキューラ「痛いよ？ 血がどばーっていっぱい出ちゃうよ？」

オキューラ「そうそう、痛いのが嫌ならおとなしくしててね〜」

オキューラ「ボクだってせっかく本物の宝箱っぽく見せてる外殻が血で汚れちゃうのは嫌だしさ」

オキューラ「……で？ オマエ、仲間は？ 一人でこんな所まで来たの？」

オキューラ「そっかー、なるほどねえ〜」

オキューラ「誰も見たことないようなお宝を見つけて、みんなに自慢したかったのかな〜？」

オキューラ「樹海のダンジョンまで一人でやってきてえ、ようやく見つけた宝箱を開けたら……」

オキューラ「ざんね〜ん、ミミックのオキューラちゃんでしたー！」

オキューラ「あはははっ、上手く騙せたでしょ？」

オキューラ「ばあーか！ オマエはここでボクに喰われる運命なんだよ！ くっくくくっ……」

オキューラ「おっとその前に……何かお宝は持ってるかな？」

オキューラ「わざわざこんな所まで来てんだから、途中でなんか拾ったりしてるんじゃない

の？」

オキューラ「は？ 金目の物なんも持ってないじゃん！ オマエ、今まで何してたんだよ？」

オキューラ「鍵開けは得意そうだったから、てっきり色々お宝を集めてる冒険者かと思ったのに」

オキューラ「ま、どんなに熟練の冒険者だろうと、ボクの擬態を見抜けるわけないけどね～」

オキューラ「見たところオマエはまだ若そうだし」

オキューラ「……………あ。ってことは、あっちの方はどうかな？」

オキューラ「へえ～、ふ～ん。いいちんちん持ってんじゃ～ん？ ふへ、ふへへへ…………」

オキューラ「ミミックは生殖も獲物頼りなんだよね～。なんたって自分一人ではろくに動けないからさ」

オキューラ「よし、すぐに食べるのはやめとこっと」

オキューラ「オマエは今からボクのオモチャだ」

オキューラ「そうと決まったら…………」

オキューラ「ボクのナカへいらっしゃ～い」

## 2. 両耳舐め両耳触手責め ～アナのナカのナカまで～

オキューラ「ようこそ、ボクのナカへ」

オキューラ「オマエの身体、宝箱にすっぽり収まったね。この箱はボクの身体そのものだからさ、もう諦めた方がいいよ？」

オキューラ「ちょっと狭いかもだけど……力を抜いて横になる感じで……ん、しょっ……と」

オキューラ「宝箱の蓋を完全に閉じちゃったから、オマエは暗くてよく見えないかな？」

オキューラ「くくくっ。教えてやるよ。オマエの手や足には触手を絡ませて拘束してるし……」

オキューラ「このボクと絡み合うように抱き合ってるから……」

オキューラ「なにか変な動きをしたらすぐに分かるの……ボクをがっかりさせないでね？」

オキューラ「よし！ 分かってくれたならいいよ」

オキューラ「オマエみたいな獲物が来てくれて、本当にうれしい」

オキューラ「ふふっ。身動きもとれないくらい狭い密室で二人きりだね。吐息や心臓の鼓動まで聞こえるほどくっついて……」

オキューラ「いっそのこと目を閉じて、視覚以外でボクを感じてみて」

オキューラ「はあ……はあ……はあ……」

オキューラ「こんなにぴったりくっついてると……お互いの体温で暑くなっちゃうね」

オキューラ「はあ、はあ……」

オキューラ「……オマエのちんちん、もらうね」

オキューラ「まずは……かたーくおっきく、しないとね」

オキューラ「さあ～て……どこを、責めようかな～」

オキューラ「ふう～」

オキューラ「あはっ。耳に息をふう～ってしたら、ゾクゾクとしたね？ そういう小さな反応も見逃さないよ？」

オキューラ「だってオマエは今、ミミックであるボクの身体の中カにいるんだから」

オキューラ「で、オマエは動けないかもだけど、ボクは身体が柔らかいから……」

オキューラ「自由自在に動けるんだ」

オキューラ「宝箱みたいな外殻も、中身もぜ～んぶ、ボクの身体なんだからね」

オキューラ「ほら、こっちこっち。身動きとれないオマエからしたら、次はどこから触られるか分からなくてドキドキするでしょ」

オキューラ「次はそっちに移動しようっかな～。よいしょっと」

オキューラ「ちゅっ……ん、ふふふっ。今度はこっちでしたあ～。こっちの耳を……ちゅっ」

オキューラ「キスただけで顔も耳も真っ赤にして……ちょろすぎ！」

オキューラ「もっとしたらどうなっちゃうの？」

オキューラ「はあ……ん、ちう、はふ……はあふ、ちゅっ」

オキューラ「柔らかい耳たぶを咥えて……あ、はあん、んちう……んんむ」

オキューラ「んふー、えるえるえる、舌の先でつついてみたりしてね。んふ、ヨダレ付いちやった」

オキューラ「逆の耳が寂しい？　なら、そっちには触手を使っちゃおっかな～」

オキューラ「へへへ……。両方の耳を、ボクの舌と、触手で同時に……はふ、ん、ふうん」

オキューラ「触手の先っぽで、オマエの耳を優しくなぞって……」

オキューラ「さっきまで暴れるオマエを押さえつけてた触手とは思えないでしょ。こんなに柔らかく繊細に動かせるんだから」

オキューラ「で、この触手を使えば……こういう風にもできるんだよ。先っぽを細くしたぬるぬるの触手で……」

オキューラ「耳の細かい溝までえ……ずるずる～ってなぞったりなんかしちゃって」

オキューラ「うぞうぞ～って、うごめく触手が耳を這って……あはあ……あ、あ、どうしよう。耳の中カまで入っちゃいそう」

オキューラ「あーあ、入っちゃった。ぬるぬるの触手に耳のアナ犯されちゃったね？」

オキューラ「今どんな気持ち？　えっちな気分になってきちゃった？」

オキューラ「じゅるじゅる、ぐっぽぐっぽって音聞こえる？　頭のなかまで響いてる？」

オキューラ「ふふ、そしたらさ、こっちの耳はボクの舌をいれてあげるよ」  
オキューラ「あー、はあ……ん、んちゅう……んちゅ、じゅるっ」  
オキューラ「ちゅるる……はふう。あ、どうかな？ 微妙に感触違うでしょ？」  
オキューラ「舌を奥まで差し込んで……んっちゅう。えおおう、えうおおん……お、えお  
えお、れるお～」  
オキューラ「はあ、ん……ボクが耳を舐めるのと一緒に……んふ、逆の耳は粘液たっぷりの  
触手で……」

オキューラ「んうむ、にむ、んむんむ……はふあ、えろお～ん。ん、ろるろるる……」  
オキューラ「この触手から出ている粘液は……ん、はあ、ボクの体液みたいな物だから、生  
温かくて気持ちイイと思うよ？」  
オキューラ「ゆっくり、優しくしてあげるからね」  
オキューラ「はむ……じゅるる……えあ、はう、あん。えうえうえう、るろろろろお」

オキューラ「ふたつのアナを同時に……はあ、はあ……あふ、える、ろるろる……ん、んう。  
えあ～……おるるろろお」  
オキューラ「どう？ 感じる？ 耳でボクのこと感じる？」  
オキューラ「ん？ どうしたの？ そんなに力いっぱい目をつぶって……もしかしてやだ  
った？」  
オキューラ「……うそつき」

オキューラ「……気持ちイイんでしょ？」

オキューラ「素直になれよ」

オキューラ「ミミックの舌と触手に耳をめちゃくちゃに犯されてるのに、抵抗できないんで  
しょ？」  
オキューラ「耳のナカをべちょべちょにされて背中がぴくぴく反応しちゃってるじゃん？」  
オキューラ「もっとボクに身をゆだねていいんだよ？」  
オキューラ「次はあ、舌と触手を左右逆にしてあげるね」

オキューラ「ボクの舌と触手、どっちが気持ちイイかな？」  
オキューラ「比べてみて……ね？」  
オキューラ「ボクの唾液でべちょべちょになった耳に、さらに粘液でぬるぬるの触手を這わ  
せて……」

オキューラ「はぁ……ん、耳をぬるぬるにされて責められるのがこんなに気持ちいいなんて  
知らなかったでしょ」

オキューラ「ん……ちゅっ。はふ、ちう、ちゅうう、ぢる……ん、あふ」

オキューラ「耳にばかり集中して……身体の方ががら空きだぞ」

オキューラ「粘液でとろとろの触手を……あはぁ、服の袖から……ズボンの裾から、侵入させて」

オキューラ「身体を中心にに向けて、にゆるにゆるが迫ってくるの……はぁ、はぁ。ぞくぞく  
くるでしょ」

オキューラ「自由を奪われて、好きなようにされるのがこんなに興奮することだったなんて  
知らなかったでしょ」

オキューラ「オマエはこんなことで興奮する変態なんだよ」

オキューラ「ひとつ賢くなったね、おバカさん」

オキューラ「んぁ～……えろ、ろろろる、ろるろるう……ん、はっ……あん、んぶ、じゅる  
るる」

オキューラ「ふへ、へへへ……そっちの耳にも触手ねじ込んじゃお」

オキューラ「で、こっちの耳にはボクの舌を……」

オキューラ「あお……んぢゅ、んぢっ、んぢう……じゅろろろろお～」

オキューラ「はぁ……はふ、耳の奥まで触手を差し込んで……ん、隙間なくパンパンになっ  
た耳のアナを……ほう、ぬるぬるでゆっくり擦って……」

オキューラ「おん、んぶ、えお、おる……るろろろろろおお、ん」

オキューラ「ぞるるるる～……ってえ、凄い音してるの聞こえる？ あははぁ……」

オキューラ「あお……じゅろろろろるん、ぢる、えるえる……ちゅばっ」

オキューラ「両方の耳から、ボクの舌と触手が出たり入ったり……」

オキューラ「擦ったり、舐めたり、吸ったり……」

オキューラ「んぶ、じゅるるろろお……んふー、ぢゅろろろろろお～。んふう～、ちゅろろ  
ろろろおっ！」

オキューラ「あれえ～？ あれれ～？」

オキューラ「どーしたの？ なんかおかしいね？ ん？」

オキューラ「ねえねえ、必死に我慢して、体裁を取り繕ってる所悪いんだけどさぁ……」

オキューラ「ちんちん勃起してんのバレバレだから。あっははは！」  
オキューラ「さっきまでふにゃふにゃだったのにね？」  
オキューラ「ミミックの長い舌と触手に興奮しちゃったの？」  
オキューラ「ぷくくく……答えてくれないの？ 別にいいけど」  
オキューラ「触ってほしい？ ちんちん触ってほしいの？」  
オキューラ「興奮してびんびんに立っちゃったちんちんを触られるの気持ちいいもんね？」  
オキューラ「じゃあ……」  
オキューラ「んふっ、まだダメ。触ってあげない」  
オキューラ「くくくっ」  
オキューラ「まだまだ楽しいコトいっぱいしたいじゃん？」

3. 手コキに触手コキにフェラに触手耳セックスに  
～全部ぐちゃぐちゃぐちゃ～

オキューラ「ちょっと動くよ。オマエはそのまま寝てていいから。オマエの上に乗るようにして……よいしょ……と」

オキューラ「んー、服が邪魔だなあ……前の部分だけ溶かしちゃうね」

オキューラ「器用でしょ？ 触手から出す粘液は好きに弄れるからさ。もちろん、毒も出せるけど……ふふふ」

オキューラ「暴れたら肉まで溶かすから。いい？」

オキューラ「……んじゃ、ボクも脱いじゃおっと」

オキューラ「で、ぬるぬるの粘液をいっぱい出して……」

オキューラ「ぴったりくっついたまま、ぬるぬるになった身体を擦りつけると……気持ち良さそうじゃない？」

オキューラ「ぬるぬるになった女の身体がオマエの身体を滑っていくの」

オキューラ「肌と肌を重ねて……ほら、ずるずる～って」

オキューラ「お互いの身体が……上から下へ……下から上へ……」

オキューラ「ん、ふ……は、はあ、はあ。あ、ふ、ふっ、ん、っしょ……ん、しょ、はあ、はあ、ふっ」

オキューラ「おっぱいもぎゅーって押し付けてるんだよ……。分かる？ おっぱいの感触は人間と同じでしょ？」

オキューラ「あ、おっぱい触ったことないか。ごめんごめん」

オキューラ「じゃあたっぷり味わって覚えてね。柔らかくて張りのあるおっぱいを押し付けて、オマエの身体を滑っていくから」

オキューラ「オマエの胸を、お腹を……ぬるぬるのおっぱいが……」

オキューラ「ん、しょ……ふっ……はあ、っしょ、うん、はふ、うん……っしょ、ん、しょ、ふ、んんー、はあ」

オキューラ「何度も、行ったり来たり……」

オキューラ「ぬるぬるになった肌と肌を、擦り合わせる感触が……」

オキューラ「う、はあ……あ、ん、っしょ、はあ……よっ、と、ふっ、はあ、あは、あふ、  
ふあ……んん、はあ、しょ……あはあ」

オキューラ「少しくすぐったくて……でも気持ちイイ……」

オキューラ「ふ、ん……あ、はあ、っしょ、ふ……んっ、と、ふっ、はう、はあ、ん、んう  
……んん、はあ……はふう」

オキューラ「あああ……力が入った首筋……おいしそう」

オキューラ「ね、ちょっとだけ、ちょっとだけだから、噛んでいい？」

オキューラ「あ～……ん、あぐ、あぐあぐ。ん、あふ、ふああん、あぐ、あぐう」

オキューラ「逃げないで……触手を首に回して……もっと、こっちに、くつついて」

オキューラ「痛くしないから。甘噛みして、がぶがぶ……って、んぐ、あぐ、あぐ、あぐ…  
…あふ、はあ、はあ」

オキューラ「あ、あ、ん……うう、ん。はあー、んふう～」

オキューラ「ん……んふっ、さっきからお腹の方でちんちん動いてるよ」

オキューラ「ねえ～え、お腹にちんちん当たってるってば。先っぽぐりぐり押し付けてきて、  
動きにくいんだけど～」

オキューラ「……あ、分かった。ねえ、もしかして気持ち良くなろうとしてるでしょ」

オキューラ「ずるーい、勝手にそんなことして」

オキューラ「まだちんちんで気持ち良くなるのは許してないんだけど」

オキューラ「これは……お仕置きが必要かなあ～？」

オキューラ「じゃあ、オマエの横に移動してっと……」

オキューラ「さてさてえ？ この勃起したちんちんをお、どうしちやおっかな～」

オキューラ「いきなり握ったりなんかしないんだからね」

オキューラ「まずは指一本だけ使って……先っちょをすりすり……」

オキューラ「力を入れずに、触れるか触れないかくらいで、さわさわ、さわさわ～……」

オキューラ「ぱんぱんになった亀頭をつんつん……からの、周りをくるくる～って、指で円

を描くように」

オキューラ「根本からゆっくりゆっくり上までなぞって……ん、しょ、はあ、んしょ……うん」

オキューラ「裏筋の所だけ細かく上下にぐりぐりい……って。しゅ、しゅ、しゅ、ぐりぐりい」

オキューラ「あはっ、気持ちよさそう……。もっとしてあげるよ。ゆーっくり優しくなぞってから、くにくにい……」

オキューラ「んふふ、もう指一本じゃ我慢できない？」

オキューラ「なら、全部の指を使ってちんちんぎゅーってしちゃお」

オキューラ「はあ……はあ……ちんちん……にぎっちゃったあ」

オキューラ「びくびくしてる……ふ、は、あ……」

オキューラ「粘液でぬるぬるになった手の指が……んふ、上下ににゆるにゆる～……って」

オキューラ「はあ……あ、すごい……あ、ふふ、かたいよ？ かたくて、どくどく脈打ってる……」

オキューラ「は、ん、はあ……ああ、少しずつ早くしてみよっか」

オキューラ「しゅ、しゅ、しゅっ……んしょ、んしょ、ん、はっ……しゅ、しゅ、しゅ……」

オキューラ「ああ……あ、ああ……ん？ どうしたの？ イキそうなの？ もう？ え～？ まだ出しちゃダメ」

オキューラ「ボクがいいよって言うまでイっちゃダメなんだからね」

オキューラ「だってまだ触手使ってないんだもん……あはっ、我慢できるかな？」

オキューラ「ちんちんに触手巻き付けて……」

オキューラ「あ……は、ふふ、いい感じ。根本は触手で、先っぽはボクの手で包んで……」

オキューラ「これでシゴいちゃお」

オキューラ「ぎゅっ……ぎゅっ……ぎゅっ……」

オキューラ「ボクがいいって言うまで出しちゃだからね」

オキューラ「ちょっと早くしてみよっかな～。どこまで我慢できるかな？」

オキューラ「ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ」

オキューラ「触手でシゴきながら、ボクの指でちんちんの先っぽの敏感な所を弄って……」

オキューラ「ぎゅっ、ぎゅっ、くり、くり……ぎゅっ、ぎゅっ、くり、くり……」

オキューラ「必死に我慢してるオマエの顔を見てたら、ボクも興奮してきちゃった」

オキューラ「はあ、はあ、はあ……んんんう～、あはあああ～。んんんう～」

オキューラ「ぎゅっ、ぎゅっ、はあ……ぎゅっ、ぎゅっ、はあ、はあ……」

オキューラ「ん、苦しそうな顔……もうダメ？ あはう……我慢できない？」

オキューラ「じゃあもっと早くシてあげる」

オキューラ「たっぷり粘液つけて、ぬるぬるにして……ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、  
ぐちゅ……」

オキューラ「はあ、はあ、はあ、しこしこ気持ちイイ？」

オキューラ「ん……しょ、はう。……しゅ、しゅ、ぎゅ、ぎゅ……ん、しょ……はう、ん  
う、んふう～」

オキューラ「あー、さすがにもう限界かな？」

オキューラ「でもね？ ダメなの。まだまだがんばってえ～」

オキューラ「んふふふふ。触手をお……」

オキューラ「袋の付け根に巻き付けて、ぎゅっ……と。ほら、これでセーエキ出なくなった  
でしょ？」

オキューラ「イキそうなくらい気持ちイイのに、射精できないの」

オキューラ「辛い？ 苦しい？ そんなに？ ボクちんちん無いからわかんない」

オキューラ「くくくっ。オマエの反応がおもしろすぎて、もっとむちゃくちゃにしてみたく  
なっちゃうんだよね～」

オキューラ「オマエのちんちんの前に移動して……よい、しょ……っと」

オキューラ「じゃあ、いただきまーす」

オキューラ「まずはボクのこの長い舌で、ぺろぺろ……って。んう、えるえる……んはあ」

オキューラ「ちょっと舐めただけなのに……ん、気持ち良さそうにしちゃって……触手で締め  
てなかったら、きっともう出ちゃってるね」

オキューラ「ん、はあ……ちんちん舐めながら、ぬるぬるのおっぱいもこすりつけて」

オキューラ「ん、ちろお、るろおおお……えう、えるえる、えろえろえろ……ん、はふ」

オキューラ「長い舌で根本から先っぽまで……ずるずるずる～って……え、るろろろろ」

オキューラ「玉々の入った袋も……ん、優しく吸ってから……ちう、んちゅ、んんちゅ」

オキューラ「舌の先で袋の裏を……あ、えろえろえろ……そのまま、ちんちんまで……じる、  
ん、はあ……えるえるるう、ん、うう」

オキューラ「は、ん……ボクがちんちんをしゃぶってる音を聞いて興奮してるの？」

オキューラ「そんなえっちな耳にもお仕置きが必要かなあ？」

オキューラ「触手をお……ずぼっ……てえ」

オキューラ「ん……あ、ちんちんどんどんかたくなるう」

オキューラ「クチでされるの好きなの？ 耳のアナを触手でずぼずぼされるの気持ちいい？ そっか〜」

オキューラ「はあ、ふ……あ、えあ、ろるろるるるるう〜、んはあ、んんう、えあ、るろるろるるるう」

オキューラ「ちんちん、ボクのクチに全部入るかなあ？」

オキューラ「んあー……ん、ふっ、んぐ、おぐ……ふは、すごい、喉の奥まで届くう」

オキューラ「んご……おぐ、お、お、おほう、んご、ふ……んぐ、あふう」

オキューラ「クチのナカに入れたらもっと大きくなったあ」

オキューラ「はあ、はあ……すご……おんっ……んぐ、おおおおご、あぐ、んが……はっ、ふっ、おごぐぐぐ、ん、んぱはあっ」

オキューラ「ちんちん奥まで咥えながらあ……同時にねっつとりと身体中を擦りつけて……はあ」

オキューラ「んむっ……んぐ、は……あ……ん、んんんう……おふう」

オキューラ「耳のナカまでぐちょぐちょに……」

オキューラ「う、あ、んああ……ふ、うん……ふっ、ううっ、んんっ」

オキューラ「こっちのアナもお」

オキューラ「ミミックに捕食されて全身をねぶられて犯されて……」

オキューラ「触手で締めてるちんちんがパンパンになってる……破裂しちゃいそう」

オキューラ「はんむ……んむ、んんんっ……はっ、じゅるん、ちる、ぢるるるる……んっ、あは」

オキューラ「んああ〜……んぐ、おろろろ……ん、じゅっ、ちうう、はっ……はうぐ、あぐ、おおう、んご、くっ、ふっ……ふう」

オキューラ「あはっ、もう何が何だか分からないでしょ？」

オキューラ「ただただ、ひたすら快感に襲われて、でもイケなくて。力を入れすぎて腰が痙攣してきたみたい」

オキューラ「あ、ああ……はふ、あんむ、あむ、ふはっ……おえろるる」

オキューラ「じゃあ……しょーがない。そろそろちんちんを締め付けてる触手をほどいてあげようか」

オキューラ「ん……ふあ、ふふっ……どう？ これでようやくイケるね？」

オキューラ「ほらほらぁ……もう限界なんでしょ？」

オキューラ「身体中ぬるぬるでえ」

オキューラ「耳のアナまで触手で犯されてえ」

オキューラ「ちんちんシゴかれて、舐められてえ……えろお、ろるる、んぢゅっ、じゅろろ  
ろおっ」

オキューラ「あ、あ、もうダメそうだね？ んんあぁー……んぐ、んぢゅ、ぬろろろろ」

オキューラ「ザコちんちん簡単すぎぃ……はんむ、ちううん、ふはぁ、んむ、ぢゅろろろ  
ろろん」

オキューラ「んんう……あ、う、んんんう。ほらぁ、イケえ……イケ、イケえ！」

オキューラ「ボクのクチのナカに……ミミックのクチのナカにい……出しちゃえええええ  
えっ」

オキューラ「んんんんーっ！ おごおっ、ごぶ、おふお」

オキューラ「あふいお……でへるう……おんぐ」

オキューラ「おぶ、んんん、ご、ぐう……かほっ、ん、すごおい、いっぱい……」

オキューラ「んぐぐ……いっぱい我慢させた分、どろっと濃厚なのが……」

オキューラ「んう……ん、んん、ごくん、ごくん、ごくん……っふはぁ〜」

オキューラ「んふー、飲んじゃったぁ〜」

オキューラ「はぁ……はぁ……はぁ……」

オキューラ「ん？ ん〜？」

オキューラ「落ち着いてる場合じゃないよ？」

オキューラ「本番は、へ、へへ……これからなんだから」

オキューラ「次はね、ボクの下のクチに、オマエのちんちんを入れるんだよ」

オキューラ「はぁ……はぁ……このちんちん、入れたら絶対気持ちイイもん……はぁ、はぁ、  
はぁ……」

オキューラ「もう、我慢できないい」

4. 背徳密室性交 ～バレたら終わりでもやめられない～

オキューラ「さーて、ちんちん入れるよ？ 入れちゃうよ？」

オキューラ「ボクの一番気持ちイイ下のクチに……」

オキューラ「オマエはそのまま横になっていいから」

オキューラ「ま、どうせ動けないでしょ？ されるがままに気持ち良くなっちゃえって」

オキューラ「よいしょ……」

オキューラ「この、下のクチ……獲物を丸呑みしてじっくり溶かしながら味わうのにも使うし」

オキューラ「ちんちん入れて擦ってセーエキ搾り取るのにも使えるし」

オキューラ「ミミックにはこんなえろーいアナがついてんのよ」

オキューラ「ここからたっぷり粘液を出して……」

オキューラ「オマエのちんちん、いただきまーす」

オキューラ「ん……んんっ！ んくう……あ、はふ……」

オキューラ「やば……はあ……ちんちん、最っ高！」

オキューラ「獲物を捕まえられない時は代わりの物を使ってるけど……やっぱ本物のちんちんが一番だわ」

オキューラ「だって自分から獲物を探しに行けないんだもん」

オキューラ「ちんちんが手に入らない時は、オナニーするしかないじゃん？」

オキューラ「オナニーばかりしてるえっちなミミックは嫌い？」

オキューラ「あはっ。ボクのナカでちんちんがびくって動いた」

オキューラ「ボクのナカってどんな具合？」

オキューラ「ん、ふう……力加減も自由自在だから……飲み込んだちんちんの根本はぎゅっと締めて……んんっ」

オキューラ「先っぽはやさしくぬるぬるに……オマエの一番気持ちいい締め付けで擦るの。あ、ああ、あああ」

オキューラ「は……ふ、人間なんかにはこんな繊細な真似できないんだから」

オキューラ「ふっ……もっと、んんうっ……！ もっと奥まで……奥の奥まで……」

オキューラ「ゆっくり、奥にあてて……うううあっ」

オキューラ「そう、そこイイのっ……ああう、あうっ。んふっ……あ、ん、はふ……ふ、ふっ、ふう」

オキューラ「あれ？ オマエのちんちん、入れただけでいっちゃいそうじゃない？ ザッコ」

オキューラ「いっちゃダメだよ？ ダメに決まってるでしょ？」

オキューラ「ボクがイクまで我慢、できるよね？」

オキューラ「じゃあ、ゆっくり動かすよ……」

オキューラ「ちんちんでボクのナカを擦って……」

オキューラ「んんう……ふう、はっ、ああう……ん、んう、んんん」

オキューラ「この絶妙な硬さと弾力……ふ、あ、ん。溶けるような熱……う、ん、んん……んあっ」

オキューラ「本物のちんちん……やっぱすごい……。ふ、あああ……これじゃなきやだあ……」

オキューラ「オナニーも気持ちイイけど、ちんちんには敵わないよう……ふう、はあ、はうあ……」

オキューラ「は、ふ……ん、んん？ ちょっと待って。この気配……」

オキューラ「これは……お宝目当てでやってきた冒険者の足音かな？」

オキューラ「今日はお客さんが多いなあ……。むー、もっと日を分けて来てくれたらいいのに」

オキューラ「ちょっと今はお取込み中なので無視するか」

オキューラ「静かにしててね？」

オキューラ「しーっ……」

オキューラ「ボクの擬態は完璧だけど、さすがにオマエが中で暴れたらバレちゃうからね」

オキューラ「楽しんでる所を邪魔されんの、ボク嫌いなんだよね。殺しちゃうかも♪ えへへ」

オキューラ「あー、目の前まで来てるなあ……」

オキューラ「ん？ なになに。そんなに熱い目で睨みつけるなよお……イジメたくなっちゃうじゃん」

オキューラ「ほら……入れたままのちんちんを、ぎゅーって」

オキューラ「ふ………あ、やば、き、気持ち、い、い……」

オキューラ「すぐそこに人がいるのに、ボクたちセックスしちゃってる」  
オキューラ「んん……ダメえ、声出したらバレちゃう」  
オキューラ「ふ……………ん、気持ち良くなってる顔を見られちゃう」  
オキューラ「でも……あ、気持ちイイ。ちんちんで気持ちイイところ擦るのやめられないい……！」

オキューラ「あ……鍵穴いじられてる……」  
オキューラ「でも……オマエの方が上手かな。オマエの鍵開けの方が、ボク……ぞくぞくきちゃったもん」  
オキューラ「……………ん……………あ……」  
オキューラ「激しく動いてるわけじゃないのに……ほんの少ししか動いてないのに……なんでこんなに気持ちイイの」  
オキューラ「……んんう……………ふ……………う、あ……………」  
オキューラ「あ……見られちゃったらどうしようね……う、は……………モンスターと交わって、ミミック相手に気持ち良くなっちゃって……」  
オキューラ「……そんなことになったら……もうオマエ、人間の街で生きていけないね」  
オキューラ「え……は……………う、ん……」  
オキューラ「絶対に……あ、バレないようにい……ん、しないとお」  
オキューラ「でも……バレないように……はうあ、こっそりえっちなことするの……あふ、気持ち良すぎい」

オキューラ「こんな近くに、人がいるんだよ……宝箱の壁一枚向こうに」  
オキューラ「イケないことしてるって背徳感がたまらないの……」  
オキューラ「ダメなのに、もっと、もっとって思っちゃう」  
オキューラ「んうー……………。ふー、ふう～……………い……………あん」  
オキューラ「だめ……だめえ……………い……………あん。バレちゃうよ……」  
オキューラ「……………うっ……………く……………はっ……………あああ、ヤバいい……………」  
オキューラ「声出ちゃうよ……気持ち良すぎて……………我慢しなくちゃいけないのに…………」  
オキューラ「えっちなことしてるの……バレたら大変なのに……………気持ちイイの、やめられないのお……………あう」  
オキューラ「激しく動いたら、バレちゃうのに……………」  
オキューラ「かたいちんちんで……………奥をぐりぐりするの……たまんない……あん、ふ……………あ……………はうあっ……」  
オキューラ「もっと……ねえ、もっと」  
オキューラ「ん、はう……少しくらいなら腰動かせるでしょ？　ね、動いてみて？」

オキューラ「あ……は……あ、それ、それやばいい……あ、あ……」

オキューラ「あ、あ、ああん……んんふう……奥……押し付けるの……だめえ、気持ち  
イイい」

オキューラ「……ふ、あ、腰を小刻みに動かして……それ好き……」

オキューラ「あ、ああ……ちんちん気持ちイイ……あう……ん気持ちイイの……ん  
んっ、んんん〜」

オキューラ「はあー、はあー……ん、ふ、う、んんう〜」

オキューラ「んん〜、そのまま続けて。気持ちイイの続けて」

オキューラ「ああ〜、あはあ〜……そこイイ、そこ好きなの……んふう……ふー、  
あ……んんー」

オキューラ「ねえ〜もっとして……声、ちゃんと我慢するから……あう……」

オキューラ「んああ……もっと、んんう……もとお……気持ちイイからあ」

オキューラ「やばい……あ……やばあああ……あああああ、あああうあうああ  
ああ〜」

オキューラ「はうあああ、すごい、奥すごい……うんんん」

オキューラ「こんなの……ダメだよお……すっごお……お、ああう……あふう」

オキューラ「へう……ん、はふう。んんー、もおお〜……外の人間、なかなかいなくな  
いあ」

オキューラ「オマエが先に来てなかったら、今頃アイツらを獲物にしてたかもね」

オキューラ「あ、あん……でもお、オマエは、ボクに捕まってよかったでしょ？ んっ……  
ふううう」

オキューラ「んあ……だってさ、騙されたミミックに犯されて……は、はふ、ちんちんハメ  
てえ……こんなに喜んでるんだもん」

オキューラ「変態め。変態めえ……！」

オキューラ「は……もう、イケそうなのに……激しくしたらすぐイっちゃいそうなのに  
……う、ん……」

オキューラ「でも……ふ、ん、我慢しなくちゃいけなくて……あ、えう……」

オキューラ「出したいね？ 出したいよね？ でもまだダメ」

オキューラ「今セーエキ出したら、匂いで外のニンゲンにバレちゃうかもよ？」

オキューラ「ミミック相手に種付けなんてしてたら、人類の敵になっちゃうね？」

オキューラ「我慢しなきゃね？ 大変だね？ でも……でもお、気持ちイイ……！ ……  
…ああ、すっごい気持ちイイい……」

オキユーラ「んんう……………ん、うあ……………んっくう……………」  
オキユーラ「ああ……………我慢できなくなってきた……………」  
オキユーラ「やばいよ……………おっきな声出ちゃいそう……………そしたら絶対バレちゃうのに」  
オキユーラ「ううう……………でも、腰止まんない……………あ、あふえ、気持ちイイのやめらんないい」  
オキユーラ「……………オマエも、ふ、ふ……………止めちゃヤだからね？」  
オキユーラ「え、う、んんう……………すぐ近くにいるあいつらにバレないように、一緒に気持ち良くなる？」

オキユーラ「ん、んんう……………あ、ダメ、ボク……………ボクもダメかも……………」

オキユーラ「だって……………だってえ……………こんなの……………だめだよお」  
オキユーラ「無理だよお……………気持ち良すぎるもん……………う……………ああああああ」  
オキユーラ「……………だめえ……………う、んは、ふ、んんん」  
オキユーラ「声、抑えられない……………ホントに……………ダメなのお……………」  
オキユーラ「んああっ……………我慢しなきゃって……………ん、ふ、思えば思うほど……………おかしくなるう……………」  
オキユーラ「バレちゃう……………バレちゃうよお……………んんっ」  
オキユーラ「オマエの、ちんちん……………あ、ふ……………奥にい、ぐりぐり押し付けられて、イっっちゃう……………」

オキユーラ「気持ち……………イイっ……………だめだめだめえ……………本当にイっっちゃう……………」  
オキユーラ「あ……………も、無理……………イキそ……………イっっちゃうってば……………」  
オキユーラ「ね、もういいよね？ イこ？ 一緒に……………んっ、くう……………」  
オキユーラ「イっっちゃう……………あ、い、イク……………イクイクイク……………イ、クううう……………っ！」

オキユーラ「……………はっ……………ふう、んんう……………う、ふっ……………はああっっ！」  
オキユーラ「はあ……………はあ……………はあ……………ん、ふ……………はあ、はあ……………」

オキユーラ「ん……………あ、あれ？ イってる間に外の人間いなくなってるっぽい」  
オキユーラ「ん。ふう……………は……………鍵が開かなくて諦めたのかな？」  
オキユーラ「はあ……………はあ……………んっ……………はあ。ねえ？ 聞いてもいいーい？」  
オキユーラ「なんで、じっとされるがままになってたのかなー？」  
オキユーラ「ねえ、なんでなんで？」

オキユーラ「自分が犠牲になってあの人達を逃がそうって考えたの？」

オキューラ「えらいねえ～」

オキューラ「それとも、ただの嫉妬？ やきもち？ ボクを独占したかった？」

オキューラ「はいはい、かわいいかわいい」

オキューラ「さっきの冒険者だってさ、罠を見抜かれて先に攻撃されたら、さすがのボクも  
危なかったかも」

オキューラ「ミミックは基本的に一人ではあまり動けないから……正体がバレて離れた場  
所から攻撃されたらキツいんだよね」

オキューラ「それなのに……どうして助けを求めなかったの？」

オキューラ「ゼーンぶ、どうしてもよくなるくらい気持ち良くなっちゃった？ あはっ、うれ  
しいなあ」

オキューラ「オマエはもうボクのおモチャだよ」

オキューラ「ふふふっ……」

5. ミミックの休憩 ～宝箱や財宝をきれいに磨いてね～

オキューラ「むふー、今日は本当にツイてるなあ。最高のオモチャが手に入ったし……」

オキューラ「しばらく気持ちいいことには困らなそう……ふふふっ」

オキューラ「そうだ、オマエにやってほしい事があるんだけど」

オキューラ「ボクがこれまでに集めた宝石や装飾品のお手入れをしてほしいんだよね」

オキューラ「日々お宝を探し求めて冒険をしてるオマエなら、それくらいできるでしょ？」

オキューラ「あとさ、宝箱もキレイにしてよ」

オキューラ「そそ、ボクの身体の外側の部分ね」

オキューラ「ちょっとだけ外に出してあげるから」

オキューラ「あ、でも、逃げないように触手を……それっ」

オキューラ「触手をオマエの足首に巻いて……っと。あはっ、ミミックに捕らわれた囚人みたーい。それとも、ボクだけの奴隷かな？」

オキューラ「どっちにしろよく似合ってるよ。くすくす……」

オキューラ「じゃ、よろしく～」

オキューラ「まずは宝石を磨いてもらおうかな……」

オキューラ「この宝石、ボクが作ったんだよね」

オキューラ「捕えた獲物を呑み込んで、溶かして、抽出した成分から作るんだ」

オキューラ「すごいでしょ～。貝も同じようなことができるみたいだけど、ボクが作った宝石の方が断然キレイなんだから」

オキューラ「この石も……元は人間だったかもねえ？ くふふふ……」

オキューラ「はい、大切に扱ってね。ボクの大事な物なんだから」

オキューラ「人間ってすぐ死んじゃうからさ～」

オキューラ「宝石にしちゃえば、いつまでもキレイなままで大事にとっておけるとって」

オキューラ「他のミミックも同じ事してるのかなあ？ ん～……たぶんしてないだろうなー。ボクはめずらしいタイプかもね」

オキューラ「ダンジョンの中で宝箱がいくつも並んでるのは不自然だから、ミミックの仲間はバラバラに暮らすのが普通なんだよ」

オキューラ「だからせっかくのボクのコレクションも自慢する相手がいなかったんだよね～」

オキューラ「……え？ 別に寂しいなんて言ってませーん」

オキユーラ「そんな話じゃありませーん」

オキユーラ「……ん、う～……えと……と、とりあえず！ 宝石のお手入れはこれくらいでいいわ！」

オキユーラ「次は宝箱の掃除！ ほら、ちゃっちゃとやって！」

オキユーラ「あんっ……いいねえ、いい手つきだよ」

オキユーラ「うまいじゃ～ん」

オキユーラ「あああああ～、いーい気持ち」

オキユーラ「あー……んんう、はふう。いい感じだよお」

オキユーラ「はあ～。なんだか身体が軽くなってく感じい～」

オキユーラ「んん～。はあ……あ、そうそう。鍵穴も綺麗にしてね」

オキユーラ「ソコはすごく繊細で敏感だから、特に気を付けてよね」

オキユーラ「きゃっ、んはははっ！ くすぐったい！」

オキユーラ「んふ……はあっ、あっ……すごい。ぴかぴかに磨かれていい気分だよ」

オキユーラ「ひゃうっ……んもう、やっぱくすぐったい……んふ、く、んふふっ」

オキユーラ「んっ、んっ……はあ、んう……はあー、いいねえ」

オキユーラ「んー……でもさ、ダンジョンの中に置かれてる宝箱があまりにもキレイすぎる  
と不自然じゃない？」

オキユーラ「少し汚してみてよ」

オキユーラ「年季の入った感じに……まだ誰も触れていない、一度も開けられたことがない  
ような……そんな伝説の宝箱みたいに」

オキユーラ「箱の下の方には、あえて泥とかつけてみたり……」

オキユーラ「いいんじゃない？ この汚れ具合！ っぽい。すごく本物っぽいよ」

オキユーラ「そしたらさ、箱の窪みには少し砂をかけて」

オキユーラ「ん～、うんうん。このザラザラ感も悪くないんじゃない？」

オキユーラ「ふふん……よしよし、イイ感じイイ感じい」

オキユーラ「このヴィンテージ感……イケる！」

オキユーラ「どっからどう見ても宝箱でしょ！」

オキユーラ「よっし、上出来だ」

オキューラ「そしたら……がんばったオマエにご褒美あげなきゃね～」

オキューラ「ほら、こっちおいで」

オキューラ「もう一度ボクのナカへ……」

6. 触手粘膜マッサージ ～柔軟性が大事～

オキューラ「ようこそようこそ……ふふふっ」

オキューラ「ボクが言うのもなんだけど、ミミックのナカへすんなり入ってくるなんてオマエ結構勇気あるんじゃない？」

オキューラ「いくら触手で繋いでいたからって、もう反抗する気すら起きないってことなのかな？」

オキューラ「あはっ、大変結構！」

オキューラ「宝箱の蓋も閉めちゃうね」

オキューラ「そしたら、うつ伏せになるようにオマエの身体を回転させてっと……よいしょっ！」

オキューラ「えっちなことしてる間ずっと動けずにいたから、体が凝っちゃってるんじゃないかと思ってね」

オキューラ「ボクがマッサージしてあげる♪」

オキューラ「もちろん普通のマッサージじゃないよ」

オキューラ「ボクね、こういう粘液も出せるんだ」

オキューラ「えっちの時に出してた粘液よりも少しサラサラでしょ」

オキューラ「これでマッサージしたらオイルマッサージみたいで気持ちイイと思うんだ」

オキューラ「触手を使って……指圧するみたいに」

オキューラ「ん、んしょ……んっ、んしょ……」

オキューラ「あ、やっぱり筋肉が固くなってゴリゴリだよ。ちゃんとほぐしてあげないとね」

オキューラ「ん、んしょ……んっ、んしょ……」

オキューラ「粘液もたっぷり追加してっと」

オキューラ「ふ……ほっ、ん……っ」と

オキューラ「痛くない？ 大丈夫？」

オキューラ「吸盤でも吸いついちゃお～」

オキューラ「力を抜いてリラックスしてね」

オキューラ「ボクの体温で温まった粘液、絶妙な力加減の触手、吸盤でちゅぽちゅぽ吸われて、気持ち良くなってくれたらうれしいな」

オキューラ「ん、しょ……と。ふっ……はふ、んっ……と」

オキューラ「凝り固まった関節もしっかりほぐしてあげるからね～」

オキューラ「だ、大丈夫！ 折らないように慎重にやるから」

オキューラ「もしもの時はごめんだけど。あはっ」

オキューラ「よっ……と」

オキューラ「これですごく身体が軽くなったと思うよ？」

オキューラ「よし……じゃ、仰向けにひっくり返すよ～。ほっ……と」

オキューラ「足の付け根のところも、優しく触手でなぞってあげる」

オキューラ「鼠径部っていうのかな？」

オキューラ「ぎゅ、ぎゅっ……って。んしょ……ふっ」

オキューラ「気持ちいい？ くすぐったい？」

オキューラ「きわどい所を触ってるもんね～……あは。触手で優しく……ぎゅ、ぎゅ」

オキューラ「しゅ、しゅっ……て。んふ、もぞもぞしてどうしたの？」

オキューラ「一番敏感なところにはは一切触れてないのに、じわじわと感度があがっていく感じがする？」

オキューラ「どうかな？ もう身体は充分にほぐれたかな？」

オキューラ「いっぱいマッサージして血流も良くなって……あっちの方も元気いっぱいみたいだね」

オキューラ「じゃあ、そろそろ……」

オキューラ「二回目のえっち、しちゃおっか～♪」

7. 密室性交二回戦 ～特別な玩具の振動と最高のちんちん～

オキューラ「ねえねえ、聞きたい事あるんだけど」

オキューラ「オマエは普段どれくらいオナニーしてるの？」

オキューラ「あはっ、なに恥ずかしがってんだよ、言えよ～」

オキューラ「宝箱の蓋もしっかり閉まってるし、誰にも聞かれないんだからいいじゃん。言っちゃえよ～」

オキューラ「答えてくれないなら……身体に聞いてみよっかな～」

オキューラ「簡単に分かっちゃうんだから」

オキューラ「たとえば……オマエの敏感な乳首をボクの長い舌で舐めてみるとね」

オキューラ「こっちの乳首と……えるえるえる」

オキューラ「こっちの乳首……るろろろろん」

オキューラ「ね、左右で感度って結構違うでしょ。普段触ってる方がより敏感に反応しちゃうんだよね～」

オキューラ「んふふふふ。なんでこんなに詳しいのかって？」

オキューラ「ボクもね……」

オキューラ「いつもオナニーしてるから」

オキューラ「気持ちいいこと、大好きなの」

オキューラ「ね、ほら見て、これ」

オキューラ「これがなんだか分かる？」

オキューラ「見た目は……先端が丸くなってるだけの、ただの筒なんだけど……」

オキューラ「隙間から筒の中へボクの特別な体液を垂らして、さらに外から小突いて刺激を与えてやると……」

オキューラ「ほら、こんなに震えるの。すごくない？」

オキューラ「この筒の中で小さい羽虫のモンスターを飼ってるんだけど」

オキューラ「ボクの興奮剤入りの粘液を入れたら、暴れてだしてこんなに震えるんだよ」

オキューラ「それでね……ふふふ。この振動してる先端を、ボクの下の方にあてると……」

オキューラ「ふああっ、ああああっ。あ、あ、やば……これ、やっぱ効くわぁ……あん、  
ああっ」

オキューラ「敏感な、ところを……細かい振動が……ああん、すごい」

オキューラ「はあ、はあ……ボクの作ったえっちなオモチャ、凄いでしょ。んんんっ」

オキューラ「ふふふ……ボクね、いつもオモチャを使ってオナニーしてるんだよ」

オキューラ「だって、常にちんちんが手に入るわけじゃないから……」

オキューラ「オモチャでオナニーしちゃってるんだ……」

オキューラ「ボクがオナニーしてる場所、見たい？」

オキューラ「いいよ、見せてあげる」

オキューラ「あ、あ、きた……これ、この振動が……ああっ、んっ、あっ」

オキューラ「ふっ……あ、あ、ああっ、んんんんっ！ んっ……」

オキューラ「ちょっとあてただけなのに……こんな……すごい、ふう、あ、ううう」

オキューラ「こんなことばかりしてちゃダメなのにね……は、あ……ん」

オキューラ「あっ……でも、この気落ち良さを知っちゃったら、もうダメなの」

オキューラ「毎日毎日……何回も……暇があれば、オナニーしちゃう」

オキューラ「すればするだけ、敏感になって……えっちな身体になっちゃって……ふあ  
あああっ」

オキューラ「やば……すぐイキそうになっちゃうし、イクの止まらなくなっちゃうから……  
ん、あ、ふ、はあ、ほどほどにしないと、いけないんだけどね……あん」

オキューラ「ふあああっ……や、やば……ホントにこれ……気持ちよすぎ……あふああ  
っ」

オキューラ「ね、オマエが持つて。これ、ボクに使って……」

オキューラ「ひあああああっ！ だめ、ああっ、急にそんなにおしつけちゃ……ふううう  
んんんっ、くうあああっ」

オキューラ「ホントに、これ、ダメだから……身体中に、ビリビリきちゃうのお」

オキューラ「同じ、振動でも……んっ、はあっ……人にやられると……お、おふうん、予想  
外の所にクるから……やばいいい」

オキューラ「でもお……せっかく目の前にちんちんがあるのに、これでイっただけもったいな  
いし……」

オキューラ「んああああっ……もう！ ちょっと……ん、んふう……それ以上されたら、  
イっっちゃうから」

オキューラ「待って……待って？　ね、あん、ふああ、んっ」  
オキューラ「ね、入れて？　ちんちん入れて？」  
オキューラ「はあ、はあ、ちんちん入れて……入れながら、ぶるぶるもあててえ」  
オキューラ「ふふふっ、オマエだって興奮してるじゃん」  
オキューラ「はふ、うう……ぶるぶる震えるオモチャで気持ち良くなってるボクを見て、ちんちんおっきくさせてんじゃん」  
オキューラ「もう入れよ？　入れちゃお？　ね、ほら、ここに……ちんちん入れてえ」

オキューラ「んっ……くう、ふううう。これこれ、やっぱこれよ」  
オキューラ「奥まで……きたあっ……この熱と、絶妙な硬さは、やっぱりちんちんじゃないと」  
オキューラ「んふふふ……オマエも気持ち良さそうな顔してる」  
オキューラ「入れただけですぐイキそうになっちゃう情けないザコちんちん♪」  
オキューラ「んっ、はっ、んんふ、これからもっと気持ちよくなっちゃうから、覚悟してね」  
オキューラ「ほら、ちんちんハメながら……オモチャも……ぶるぶるのオモチャもあてて……」

オキューラ「ひゃううう！　んっ、く、んー、んうううう！」  
オキューラ「んぐ、が……あ、振動が……ちんちんを伝わって……奥まで響くうう……」  
オキューラ「あ、あっ、あっ……これ、やば、ふああああああっ」  
オキューラ「う、ふう……は、へう……ちょっとイっちゃった、あ、あふ、んんん……」  
オキューラ「オマエも気持ちイイでしょお。この振動、クセになるの分かるでしょ？」  
オキューラ「ん？　あははっ、オマエもイキそうになっちゃったの？」  
オキューラ「はあ、はあ……こんな感触は初めてかな？」  
オキューラ「ね、ほら、休んでないで、もっとして……ダメ……やめちゃだだよ……まだ全然足りないよう……」  
オキューラ「まだまだ入れたばっかなんだから……ふっ、うう、もっと気持ち良くなりたいのお……」  
オキューラ「ほらあっ、奥、ぐりぐりしてっ」

オキューラ「あああっ、ああっ、んああああっ」  
オキューラ「もっとだよ……うあああっ。……そこ好き、好きなの……あふあ、んふあああっ」  
オキューラ「奥を押して、ひっかいて……外からは、振動があっ」

オキューラ「はーっ、はーっ、んくっ……気持ち、イイ……」

オキューラ「あ、ああっ……ちんちんも、オモチャも、そんな……押しつけられたらあっ……」

オキューラ「ふああああえう……ダメだ、もうバカになる……何も考えらんない……」

オキューラ「力、入なくて……宝箱のクチも開いちゃう……」

オキューラ「ふああああああっ……んふー、んふー、んんんくう、ああっ」

オキューラ「突いて、ちんちんでおもいきり突いてえ……宝箱の蓋、開けたからぁ……思  
いきり、動かしてえ！」

オキューラ「うあああああ！ 擦ってる！ ボクのナカ、ちんちんが擦ってるう」

オキューラ「あっ、ああっ、んふ、んんっ……あ、あん。ボクも腰が動いちゃう……、オマ  
エに馬乗りになって、腰を打ちつけちゃう」

オキューラ「ひあああああ！ 振動も、やばい……あん、んあっ、あ、ああっ」

オキューラ「こんなの……初めて……は、ふ、んんっ、あゝあゝあゝあゝ」

オキューラ「おがしくなるう……えう、んんんーっ。こんなの、むりい……」

オキューラ「あっ！ そこ、そこダメ、奥は敏感だから……ああっ」

オキューラ「うあああっ！ ダメえダメえ、んっ、ああああっ……奥ばっかり突いちゃらめ  
えッ！」

オキューラ「そこ、や……弱い。ああっ、やあああっ！ ダメえ、そこ擦られたら……イ  
っちゃう、すぐイっちゃう、やあああああっ」

オキューラ「あーっ、あーっ……あ、あゝ、あゝーっ！」

オキューラ「や、んんんーっ……ダメっ、イクの止まらない……らめえ！」

オキューラ「うあああ、んああああああーっ」

オキューラ「ほんとに、むりい……だめだめだめえ……ふあう、ううっ、ああああんん！」

オキューラ「イってる……イってるからあっ！ イってるのおおお！」

オキューラ「んゝんゝんゝんゝーっ！ あああああっ！」

オキューラ「あ、それ、や、あっ……あ、あっ……」

オキューラ「ちんちんで弱いところぐりぐりして……ぶるぶるまで……や、あっ、んやっ、  
はう……」

オキューラ「んひああっ……う、うううーっ！ あ、あ、あ、あふう。おかしくなるう」

オキューラ「はっ、はっ、んんんうう！ へあ、んなあっ、うううんんっ」

オキューラ「そんなの、そんなにされたら、無理だよぉ……」

オキユーラ「ひあああっ！ あゝーっ……あゝ、あゝっ、はあっ！ んっくああああっ！」  
オキユーラ「あゝあゝあゝあゝあゝっ、ん気持ちイイ……気持ちイイいい……ひいあああああああ  
ああ」  
オキユーラ「く……ふ、はう、おん、オマエだって、限界なくせに！ あ、ああっ」  
オキユーラ「あうう、うああっ、はうう！ んんんっ、あゝあゝあゝあゝあゝっ」  
オキユーラ「オマエも、出しちゃえ！ あああっ、ああんっ。出せ、出せえっ」  
オキユーラ「イケえ！ ボクの痙攣おまんこでイっちゃええ！ うああああああああっ！」

オキユーラ「ん、は、はーっ。あ、んんっ。ナカに、熱いの、出てる……」  
オキユーラ「へへ……まだ、まだだよ？ ん、もっと、ね？ もっとお、もっとちょうだい  
い」  
オキユーラ「ちんちん、ぎゅーって締めて……はあ、はあ、そのまま……んああっ、なああ  
あっ、まんこのひだひだで擦ってえ……」  
オキユーラ「それえ、そこお！ はうう、だめだめっ、ううんっ」  
オキユーラ「気持ちイイ、気持ちイイい……ああああっ、気持ちイイいっ！ あゝあゝあゝあゝ  
あゝっ」  
オキユーラ「ほら、ほら、またイク。あ、ああ、イキそうになってる！ はっ、はっ、ん、  
イっケえええ！」  
オキユーラ「一緒に……ボクと一緒にい……全部出して、ナカに出してえ！」  
オキユーラ「イクよ、んっ、んんっ、イクよ！ んっ……ああああああああああああっ！」

オキユーラ「ん、か……は、はっ、ふっ……んん、んくっ、ふうー」  
オキユーラ「はあ……はあ……」  
オキユーラ「ん、んふー、ふう……んぐ、んん、気持ちイイ……」  
オキユーラ「はあ、はあ、はあ……」

オキユーラ「おーい、大丈夫ー？」  
オキユーラ「イキすぎて死んでないよね？ あははっ」  
オキユーラ「ぶるぶる震えるオモチャもいいんだけど、やっぱりちんちんには敵わないよなあ」  
オキユーラ「いや、オマエのちんちんだからこんなに気持ちイイのかな？」  
オキユーラ「ふふふっ……となれば、やっぱりオマエもボクのオモチャにしたいなあ」

8. 【ルート分岐】質問 ～いたずら者のミミック～

オキューラ「ねえ……ねえ？ ねえってば、聞いている？」

オキューラ「いっぱい気持ち良くなって、ぼーとしちゃってるの？」

オキューラ「分かるけど！ ボクもあんなに気持ち良くなっちゃったの初めてだったけど」

オキューラ「もう……」

オキューラ「そのまま寝てていからさ、ボクの話聞いてくれる？」

オキューラ「ボクね……」

オキューラ「オマエの事、本当に気に入っちゃった」

オキューラ「えへへ……」

オキューラ「だから、さ……。提案なんだけど」

オキューラ「ボクだけのオモチャとして、ずっとここに……二人で一緒にいたりとか……その……」

オキューラ「そういうのって……オマエは、どう思う？」

オキューラ「あれ？ あんまりうれしそうじゃないね」

オキューラ「なんでよー。オマエがいてくれたら気持ちイイこといっぱいできるし、擬態の精度もあがっていい事だらけなんだけどな」

オキューラ「他の人間を餌にハメるための協力はしたくないってこと？」

オキューラ「まだそんな正義漢ぶってるの？ そんな事を言う子は……」

オキューラ「下のクチで食べちゃうぞ？」

オキューラ「下半身にあるこのアナからオマエを丸呑みにして……」

オキューラ「肉も、骨も、どろどろに消化して、他の獲物と同じように宝石にして……」

オキューラ「ボクがずーっと大事に大事にしてあげる」

オキューラ「あははっ……どのみち、この宝箱からは出られないから……ボクのオモチャになるか、食べられるか、好きな方を選んでいーよ？」

オキューラ「さあ、どうする？」

9 a. 【所有物ルート】箱の中でドロドロ密着セックス  
～いつまでもミミックのおモチャ～

オキューラ「ん、ふっ、ふふふっ……」

オキューラ「お、獲物の気配……しーっ、オマエ、静かにしてるんだよ」

オキューラ「ふーん、ボクの周りを歩き回って、ずいぶん注意深いじゃん」

オキューラ「お、キタキタ！ ついに鍵穴に手を……さあ、開けられるかなあ～？」

オキューラ「へえ、なかなか繊細でいい所弄ってくるじゃん」

オキューラ「ああ～ん、そんなにされたら感じちゃうよ～……むふ、なんてね」

オキューラ「お、もうちょっとじゃん？ さあ……こいこいこい」

オキューラ「って、あれ？」

オキューラ「あ～、逃げられた～」

オキューラ「バレちゃったのかな？」

オキューラ「むー、オマエがもぞもぞ動くせいだろお？」

オキューラ「絶対そうだよ、もー」

オキューラ「でも……くすくす、しょうがないよね～。なにしろ触手でちんちんいじってる  
もんねえ」

オキューラ「しゅ、しゅ、しゅ……って。あはっ」

オキューラ「バレないように我慢しなきゃいけないのに、抑えられないくらい反応しちゃっ  
て」

オキューラ「オマエが涙目になりながら快感に耐えてる姿がおかしくて、ついついボクも調  
子に乗っちゃった」

オキューラ「でもお、それはそれ、これはこれ。獲物を逃したのにはやっぱり腹が立つしい  
……」

オキューラ「むしゃくしゃするからオマエを犯してストレス解消しなきゃ」

オキューラ「ボクのおモチャとしてずっと一緒にいるって決めたのはオマエなんだから…  
…ふふふっ」

オキューラ「責任、とってよね」

オキューラ「ボクも我慢できないし、オマエのちんちんもぱんぱんに張ってるし、もう入れちゃうね」

オキューラ「ん、そういえば……人間の男は女のまんこにちんちんを入れるんでしょ？」

オキューラ「ボクの下のクチは人間のまんことは違うけど……でも、あえてまんこって言った方がオマエは興奮するのかな？」

オキューラ「くくくくっ……相変わらずちょろい人間だねえオマエは……あははっ♪」

オキューラ「ほら、ハメて……オマエのちんちん、ボクのおまんこにハメてえ……」

オキューラ「オマエのちんちんで、ボクのおまんこを満足させるまで……許さない、からっ……ふ、ん、あ……んああ……」

オキューラ「入っちゃう、ボクのおまんこを広げながら……えあ、んふ、んふー……」

オキューラ「あああ、気持ちいい……ん……あ……」

オキューラ「ボクの気持ちイイ所にぴったりハマるの、やばいよお」

オキューラ「こんなの知っちゃったら、もう他のオモチャじゃ満足できないかも」

オキューラ「あ……ん、くふ、うう……気持ちイイ……」

オキューラ「あのね、気持ちイイの……ホントに、もうダメなの……」

オキューラ「宝箱のナカにぎゅうぎゅうに詰まって、身動きもとれないくらい密着して、声を抑えながらするえっちがこんなに気持ちイイなんて……」

オキューラ「あん、んんんーっ……ああん、ふっ、ふああ……」

オキューラ「あ、ふ、ああっ。外にいる人間に、バレるかもってスリルが……たまんない」

オキューラ「もう完全に身体が覚えちゃったあ……この快感を覚えちゃって忘れられないのお」

オキューラ「ボクの弱いところ……ちんちんでごりごり押して……ふ、は、ひっかいてえ……」

オキューラ「……ん、そう、そこだよ……そこ、イイの……」

オキューラ「そこそこお……んん、上手……それ好きなの。気持ちイイからもっとしてえ」

オキューラ「あふう、ふーっ……ん、ん、はあう！　そこ好きいい、だめえ」

オキューラ「ら、め……それっ、らめえ……や、あ、ああっ、あっ……いちばんっ……イイ、

とこ……あたって、あ……んあっ」

オキューラ「ボク、なんかおかしいよおっ。奥から、なんか……あ、くる、来ちゃうっ……  
ダメ、あ、あっ」

オキューラ「あ……なんか……ううう……漏れちゃいそう。いっぱい粘液出ちゃいそう」

オキューラ「は、あ……だめ、出ちゃう……漏らしちゃう……ひ、う……んんんーっ！」

オキューラ「気持ち良すぎて……ボクのおまんこバカになっちゃったあ……う、はあ……  
…だめ、また出ひゃう……」

オキューラ「ふああああっ！ あああっ！」

オキューラ「えはあ……調節きかなくなっちゃったあ……」

オキューラ「でも、もっと……もっとお……」

オキューラ「オマエが欲しいのお」

オキューラ「ぜえんぶ、ボクの物にするんだから……」

オキューラ「ん、あ……う、く、ふ、ふふ」

オキューラ「触手をオマエの身体に絡ませて……」

オキューラ「全部の触手を使って、オマエを抱きしめるの。ぴったりくっついて離れないよ  
うに」

オキューラ「えう、あふう……う、んんっ……」

オキューラ「吸盤も使って……もう絶対に離さないっ」

オキューラ「逃がさないからあ」

オキューラ「オマエも……このちんちん、ボク以外で気持ち良くなっちゃだよ？」

オキューラ「離れないで、ね？」

オキューラ「すご……！ あん、あ、あっ……素敵、オマエのちんちん……最高だよお」

オキューラ「ひぐ、うっくう……うう、んんーっ、あああっ！」

オキューラ「粘液でドロドロになったら身体を擦り合わせて……全身が性感帯になっちゃ  
ったみたいに敏感で……」

オキューラ「もう……たまないよお……」

オキューラ「もっと、ねえもっと……オマエのちんちんでかきまわしてえ……あ、ふあああ

あっ」

オキューラ「も、だめ、ダメだ、ボク……イキそう……。オマエも、ね？　一緒にイこ？　ち  
んちんから熱いセーエキ出して？」

オキューラ「……………だめだめ、ほんとに、むり、むりい……も、あああああっ」

オキューラ「えあ……………イク、イクう、イックうううんんんん」

オキューラ「……………んん、んんんーっ、ふー、ふーっ……………」

オキューラ「は、ふ……わずかな隙間もないくらい密着して、どこからがボクでどこからが  
オマエなのか分からないくらい」

オキューラ「ゼーんぶぐちゃぐちゃに混ざりあって、ひとつになっちゃってるみたいに」

オキューラ「全身が性感帯になっちゃったみたいに……………気持ちイイ事しか考えられな  
くてひあう、へはあ……………んんんーっ」

オキューラ「そこ、いいの……いい、もっと……もっと……あっ、いいいいいい」

オキューラ「も、もう……ずっとイってる……とまんない……とまんないよお……」

オキューラ「オマエも、ね？　イって？　好きな時に、何回でも……出せるだけ、全部……  
ボクのナカにい……んあんっ、んんんーっ」

オキューラ「えあああ……………うふう……ふう……………あ、イってるイってるイってるう…  
…うああああああああっ！」

オキューラ「ひ……ひ……へあ……………んはっ、うく、気持ちイイ、あ」

オキューラ「熱いの、いっぱい出てる……う、ふうあ、んあん、あううううう」

オキューラ「はううう、ん……ボク、おかしくなっちゃった……なんか、もう、イキっぱな  
しなの……あ、あっ、うああああああっ！」

オキューラ「あ……へ、ねえ、ふふふっ。……………オマエもイってるでしょ？　もう何回イ  
ったの？」

オキューラ「分かんない……も、どうでもいいかあ♪　あ、あ、また、また、イック……イ  
っくう、んっあああああああああっ！」

オキューラ「んっ、ん、ふ……………はひ、はふ、んんん」

オキューラ「あはあ……オマエ、最高のオモチャだよ！」

オキューラ「絶対に手放さないからねっ」

オキューラ「はあ、はあ、はあ……」

オキューラ「あはあ……ボクのおまんこも、宝箱のナカも……どろどろだあ」

オキューラ「二人の体液ですごいことになってるよー」

オキューラ「あとでちゃんと掃除してね、ボクだけの奴隷くん……♪」

9b. 【丸呑みルート】 ミミックの宝物 ～宝箱に喰われ宝石に～

オキューラ「どうするか、答えは決まった？」

オキューラ「ふむ……ボクに食べられたいの？ ドロドロに溶かされてキレイな宝石にしてほしいんだ」

オキューラ「そっかー……。分かった」

オキューラ「じゃあ一度オマエを外に出して……っと」

オキューラ「はい。口、開けて。そんで、今から出す粘液を全部飲んで」

オキューラ「これは、まあ……麻酔みたいなものだよ」

オキューラ「自分からミミックに食べられるのを選んだとはいえ、痛いのは嫌でしょ？」

オキューラ「どうかな？ すぐに効いてくと思うんだけど」

オキューラ「お、だんだん力が入らなくなってきたかな」

オキューラ「大丈夫、触手で支えてあげるから。ボクに身を委ねて」

オキューラ「そしたら……このままだとちょっと固くて、食べづらそうだから……」

オキューラ「こっちに来て。宝箱のクチでオマエの骨を折ったり、肉を叩いて柔らかくするの」

オキューラ「そのまま食べる事もできるんだけど、しっかり噛んだ方が食べやすいし、ゆっくり味わえるから」

オキューラ「大丈夫、痛くしないって。そのために麻酔を飲ませたんだもん」

オキューラ「怖かったら目をつぶってていいからね」

オキューラ「じゃあ、いくよ……」

オキューラ「がぶ、がぶ……って」

オキューラ「関節を外して、大きな骨は折って、砕いて……」

オキューラ「ほら、痛くないでしょ？」

オキューラ「オマエは今、ミミックに咀嚼されてるんだよ」

オキューラ「がぶがぶ、がぶがぶ」

オキューラ「にしし……いい感じかな？」

オキューラ「ボクの下のクチで、オマエを丸ごと呑み込んじゃうね」

オキューラ「じゃあ……いただきまーす」

オキューラ「んんんあああああああ〜」

オキューラ「ん……んぐ……お……んんんう」

オキューラ「ふっ……あ、んふー、んふー……んはあああ〜……ひっ……けっぷう〜」

オキューラ「は、へあ……ふあああああ……。食べちゃったあ。ひくっ」

オキューラ「んん？ どうしたの？」

オキューラ「自分の身体が少しずつ溶けていくのを目の当たりにして怖くなっちゃった？」

オキューラ「でも、さっき飲ませた感覚を麻痺させる毒のおかげで痛みは感じないでしょ？」

オキューラ「怖くないよ。大丈夫だから、ボクに身を委ねて」

オキューラ「んんん〜、あったかい……オマエの熱も、鼓動も、まだまだ感じる……」

オキューラ「もぉ、お腹ぱんぱん……」

オキューラ「あは、あまりの幸福感に思わず宝箱のクチも開いちゃった」

オキューラ「獲物を生きたまま丸呑みにしたこの感覚……」

オキューラ「ああ……満たされてるって感じ……」

オキューラ「……………最高」

オキューラ「ふふふ……ね、ね？ まだボクの声が聞こえるかな？」

オキューラ「全部溶かして吸収するのにはちょっと時間がかかるんだよ」

オキューラ「ミミックは獲物が捕まえられなかった時に備えて、ゆっくりゆっくり消化していくからね」

オキューラ「そうだなあ……オマエくらいの大きさの人間だったら……全部消化するまで七日くらいかかるかな？」

オキューラ「オマエがどんな宝石になるか楽しみだなあ」

オキューラ「こればかりはできてみないと分からないからさ」

オキューラ「最後の時間、ボクとお話でもしよっか」

オキューラ「もうオマエは喋れないかもだけど」

オキューラ「まだほんの少しは身体が動くはず」

オキューラ「それが相槌の代わりだね。意識のある間はそうやって合図を送ってほしいな」

オキューラ「それじゃ……邪魔が入らないように、宝箱の蓋も閉めて……二人きりで」

オキューラ「オマエはボクの大切な宝物だよ……くすっ、くすくすくす……」

(END)